
零崎殺識の人間関係

佳織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎殺識の人間関係

【Zコード】

N2687X

【作者名】

佳織

【あらすじ】

僕の名は零崎殺識。表での名前は秋冬翠 - しゅんとう さつき - 。僕の妹は零崎樂織。表での名前は春夏希良々 - しゅんか きらら - 。僕達殺人鬼が迎えるのは、所詮終わりの無い終わりだった。仮想人間シリーズ第1弾。

せつめいシリーズ（前書き）

あつはー、DRRRと化物語をどう繋げるかが問題だ。

せつときらシリーズ

0章 人物紹介

主人公：零崎殺識

本名：春夏秋冬殺鬼

表世界での名：秋冬鬼

二つ名：昏迷僭主

- カレイドスコープディスペア -

人形煉獄

- ナパームフェイク -

年齢：19

身長：170cm 体重 53kg

武器：斧 紋殺幻想 - ミラージュスフィア -

人識と同じく生まれついての血統書付きの殺人鬼。

殺鬼と付けられたのはその所為で、案外この名も気に入っているらしい。

一日の平均殺人数、10。（自分から襲つた場合。）

襲われた場合には限界が無い。

得意な事は人殺しだけではなく、たまに喜楽の遊びや訓練に付き合う。

殺し方は主に首を落とす方法。

ちなみに喜楽は殺喜に全てにおいて勝てた事が無い。

戯言遣いとは友人通り越して大親友。

ただあの軋識が従つていたという友が恐ろしく怖いらしい。

ヒロイン

主人公：零崎 楽織
せろさきらくおり

本名：春夏秋冬 喜樂
ひととせきらく

表世界での名：春夏希良々（しゅんかきらら）

一つ名：墮落幻影 - カレイドスコープアイズ -

二重解体 - ダブルブレイカー -

年齢：15

身長 153cm 体重 37kg

武器：チーンソー 微小童話 - プラズマビリーバー -
(銃 傀儡公主 - スパイラルイミテーション -)

金髪三つ編みポニー テールが特徴。

というかポニー テールを三つ編みで括つてある。

美少女で気が強く人を守れる優しい子。

それ故に人殺しは好まないが、零崎は人の段階を超して愛している為、

零崎を傷付ける者は容赦なくチーンソーを振るう。

一番体力が無く、腹筋回数30秒最大16回、握力15。

筋力も余り無い為、チーンソーは軽い物を選んでいる。

時折銃に変わる。

軋識にビリーとかカレーとかブルブとか呼ばれる事だけが悩み。

ルイカラルと呼んでもらっているが、喧嘩した場合ビリーになる。

零崎を侮辱されたり過去の話を持ち出されると凄い事になる。

闇織よりはではないが一人でアパートを粉々に出来るほどになる。

せつめいシリーズ（後書き）

（・・・・）ショボーン

1章 終わりから始まつ始まつで終わる。（前書き）

つまりは最初で最後の一つ事だ。ジンヤーは。

1章 終わりから始まり始まりで終わる。

春夏秋冬殺鬼は普通に人生を送っている。

だがその名前が故に学生時代は意味も無く侮蔑され、

妹の喜楽も意味も無く侮蔑されていた。

いや、喜楽に関しては男子からは侮蔑、女子からは嫉妬を受けていた。

それは劣る物無いほどの美形だったからだ。

（殺鬼も美形だが名前の所為で乙女心より恐怖心が芽生えたらしい。）

現在殺鬼は大学生を中退した。

1週間の大学ライフだった。

「もーっ！一ちゃん何で中退しちゃうのっ！？」

せっかくのいーサンがいる学校でそーーー？

鬱織ちゃんも中退したしさあー。」

喜楽は机に突っ伏した状態で顔をだし、手足をぱたぱたして嘆いた。

「その、「兄さん」みたいに「一」を呼ぶのはやめれ。喜楽」

「ほえ？零崎以外の人に兄ちゃん的なコト呼んじや駄目なの？？」

「はアッ……！」

「嫉妬すか……嫉妬ですね！？お兄様！……！」

「分かりますた……了解でっせー！」

「落ち着け。そういう意味じゃない。発音の問題つてのが（ゝゝ）」

「セーイツ」とーん……「承リヨウシヨー！」

「せつせーん……出発せーん……！」

「なははー！」

さらりと激しく手足をばたつかせる。

「エンジン停止。」

殺鬼は常備しているハリセン（喜楽用）で喜楽を叩いた。

もちろん手加減はしている。

ヒュンッ……だなんて音はせず、

ぱすん。と喜楽の頭にハリセンが乗った。

「ほえ（ぱすん）……あ、えつと、

あつ、痛ツ！…」

喜楽はそれほど痛くないハリセンを頭で受けた。

「反応遅いよ。

それからテンションショントダゲ。」

「了解！！

【あいりの「トンショングもとにもどつたー】

よし。で、兄ちゃんまた大学入る氣い無いの？」

喜楽は首を傾げる。

「多分戻るよ。まだ理数系はしたいし。」

殺鬼は喜楽の机にあつた椅子に座り、頬杖をつく。

「ふうん、なら良かつた。

「一ちゃんは兄ちゃんが居た時す」に楽しそうだよ。」

ほわわんとした雰囲気で喜楽は笑つ。

「……だといいけどね。」

その時

ひんぽん

「えーと、喜楽ちゃん？」

戯言遣いが戸を開ける。

喜楽は飛ぶように席を立つ。

ハターン！と椅子から一飛んだ。

ほら来た!! 嘸アすれはかもよ!!

「あ、やっぱり喜楽ちゃんだつたんだ」

「ほえ、何が」

「さりきかじへしやみが止まらなくてね、

喜楽ちゃんの仕業か

ふつ、あつは、聞いた！？

くしゃみの発信源で此処まで来たんだよ！？

テレビで放送すべきだ！！

きつとこれは電話の次に有効な（「や

ともかく上がって上がって！！

もー私のでんせんはとくの間に上がってみるよっ！

A G E A G E だよーー！

「悪い。こんな妹で

「あ、いや。

『氣にしないでくれ、こつもの事だ』

「やうだな

「セヅナイトン

- 閑話休題 -

「・・・つていう話を先程してたんだ。」

「うん、絶対相性良いよね、二人！」

「「嘘だ」」

「ホントだよー…嘘じゃないよー！」

だつて兄ちゃんといーさんちゅうに口調似てるし、

趣味だつて合ひうし、

それから、えーと…。

喜楽は言葉につまり人差し指を口の下に当て瞳を上へずりした。

考えるポーズだ。

「えーと…」

今度は「考える人」のポーズをとりだす喜楽。

「もうここのよ、喜楽ちゃん。」

喜楽の頭にいーちゃんは手を置く。

撫でているのではない。此処重要。

「・・・む。」

ホントに似てるんだけどなあ・・・。」

「で、どうか、喜楽ちゃんが高校に通つてるつて、噂聞いて此処きたんだけど。」

「あ、くしゃみじゃなこ。」

「へ、あ、おれた。」

「うわ、忘れっぽい。」

まあびーでもこー。」

「う、通つてるよ。」

来良学園。中々いい高校だよ」

「こや、でも喜楽ちゃん殺人鬼でしょ、

るべに変装もしないし警察来たら一発で終わるよ」

「やんとおは学校」と破壊するからだいじょぶい。」

「やつこいつ問題?」

「あ、そつか、周りにパーティー集まつてるかあ、

「それは無理つてもんだよー。」

「なはせー、やつてみなきやわかんないぜ？」

つーより私ガツコに3年くらいいたら警察の人も気付くだろうけど、

今私は高3設定だから大丈ぶい！」

2章 1ヶ月前（前書き）

らじらがくえん。

2章 1ヶ月前

それは1ヶ月前に遡る。

「・・・喜樂？」

「・・・えへへ」

「今なにをしてるのかな？」

「べ、べんきょー」

「喜樂、お前ひよつと勉教しあげじやないか？」

「・・・何ゆえ？」

「これ、考え方が高3だぞ」

「・・・んー」

「ともかく・・・、お前今中3なんだから、
中3の勉強をしろ。」

「？」

「中3が高3の勉教しちゃ駄目なの？」

「駄目つてワケじやねーよ。ただ・・・。」

「ただ?」

「・・・

まあいいか、喜楽。

お前は高校に入れ。」

「・・・はい？話が分からぬ。」

おや？ わりのようすが・・・。

「来良学園 だよ。知つてるか？」

「・・・殺鬼兄ちゃん、

こないだ私を澄百合学園に入学させようとしたでしょ、
今でも覚えてるよ。忘れたなんて言わせないよ。

それに殺人鬼から殺人を教わってる春夏秋冬喜楽だ。

どうせ普通じゃない学校なんですよ。」

「・・・普通だよ。

勉教目的で行くんだ。」

「・・・ふー・・・ん？」

まだ怪しげな顔になつて、

そして5秒後、何も無かつたかのようだけれど喜楽は言った。

「まあ怪しい学校だつたら私その学校」と壊滅をせるからだいじょ
ぶ

「お前人殺しは好まないキヤラじやねーかよ」

「・・・おや、人識お兄ちゃんではござらんか」

「かははつ、何だよ!ござらんかつて」

「ふほうじんにゅーいくない・・・

つて、人識兄ちゃんは家賊だつたや。」

「おつ、樂織、殺識。」

「・・・人識さん、今日は」

「同じ同じ歳だろ、さん付けすんな

「あ、すいません。

人識、今日は

「ほんとに言いやがつた

「?」

「さつきまで私達高校の話してたんだよー、

私が高校に行くとか云々。

「へー、」

「嫌だけどね

「え

「・・・兄さん?

零崎殺識兄さん?

何でそんな動搖してんのかなあ??

んー? 言つてみてー?

何かなー?

「あ・・・いや、

制服、もう注文して届いてるんだよね。

入学届けも出したし

「・・・。」

行く」とこなりますた。

3章 高校転校（前書き）

注意です。よく読んでください。

阿良々木ハーレムの皆様は新潟に住んでるはずですが、

池袋に住んでる設定です。

覚えとけよー（ジャイアン）

「始めまして！」

春夏希良々です！よろしくお願いします！

ええと、京都から越して來たので全然池袋の知識ないでーっす！

ハブにしたらおひつぞーーなははーつー！」

「ハコーハコー……！」

「なははつ、この学校たのしそーだなーーー！」

「えー、では、次、秋冬。」

「・・・秋冬舉です、よろしくお願いします。」

あ、ジモ、喜楽です。

私の名前の由来をお教えしましょー。

「お前行き成り自「」紹介してゐる時に裏舞台に出てきたと思つたら何自分の名前の由来解説しようとしてんだよ」のキチガイ外道」

とか思つてゐる人が居たらすいません。

えー、皆さん、「ひととせ」って漢字で打つてみてください。

「一年」って出ませんか？

はい、私の名前は喜怒哀楽からとっています。

良い意味のをとっています。

あれっすね、私は極めて良い名前なんすよ。

一年間ずっと笑つたり楽しんだりするつていつそんな意味です。

さて、兄ちゃん。

兄ちゃんは別です。悪い意味なんです。

一年殺鬼。

一年間ずっと殺人鬼つてわけです。

まあこんな感じで私達の名前が出来てるわけです。

厨2とか言つたら画面から私が飛び出しきりますよ。多分。

うん、ええ。

- - - - -

「兄よ」

苺マー ガリンパンを持ちながら兄の耳元で囁く喜楽。

「何だ・・・樂織」

一方焼きそばパンを持ちながら常音で話す殺鬼。

「何でパンつて人氣なんだううね」

こそつ と喋る喜楽に殺鬼は

「知らねえよ」

と返した。

「苺つてさあ、甘くないよね」

「甘酸つぱいことでも言いたいのか」

「辛い」

「お前の味覚が不安だよ」

「渋い」

「じゃあ食うなよー」

「マーガリン美味しいもん！」

「マーガリンパンの選択は無かったのかよー。」

「味気ないしー。」

「じゃあお前何でそれ選んだんだよー。」

「・・・いや、何だかんだ甘つたるいキャラを作らつかと」

口にパンを押し込む喜楽。

「キャラの為なら苦労は惜しまないのかお前は

とんでもない奴だった。

とこうか毎日食うのかよ。

「てかさあ、全然池袋の情報知らないんだけど。

なんかそれっぽい人居ないの？

「う・・・なんか

M 「池袋つて人」

「僕に言つな」

「京都の事なら何でも知ってるんだけどなあ

「あー」と大口を開けまたパンを頬張る喜楽。

整った顔立ちは決して変わらないが（むしろ可愛い）

女らしさの微塵もなくその苺マーベリンパンを食べる意味が皆無だつた。

僕も焼きそばパンを一口食べる。

美味しかった。

「・・・いー、元気かな」

「？」

人差し指で口に付いた苺ジャムを取つている喜楽。

「元気だつて。いーさんの事だ。

死にかけても元気だつて」

にいと笑う喜楽。

「・・・付いてる」

僕はウーットテイッシュで口拭つてやる。

「つつていうかさあ、何で高校なんか通う」とになつたの？

「ああ、喜楽にはまだ話してなかつたか。」

3章 高校転校（後書き）

零崎シリーズ書くの面白いです w

4章 回想（前書き）

潤さんとの会話。

しょ「はー」れでジャッジメント。」

「うわ」

オセロを裏返す殺鬼。

白色で埋まっていた。

「何事にも白は勝つんだよ。」

いー、白でやつてみなよ」

「そついう問題なのかよ・・・。」

随分とチートだな。

て、喜楽ちゃんは?」

「ああ、県外まで行つて零崎しに行つてる。」

京都で零崎控えろつて人識兄が言われたそだから。」

「そこまでしてかよ」

•
•
•
h?
?

赤色の気配。

二人同時に振り向いた。

『アーティストのアート』――2-1

赤い声。

でも「あの」声だつた。

○

は——の——い——！

「笑うなぼく頑張れぼく」

いーが横を向きながら讐言の様に呴く。

いや。戯言か。

アパートから駆け下りる。

「どうしたんです潤ちゃん」

「こやれあ、殺鬼ちゃんの妹ちゃん。

喜楽ちゃんの事なんだけど」

「はー?」

「わざわざ魔術師に捕まつてた

「はー?」

「すげえ反応。

まあそれは何とかなったんだけどよ。

あたしが助けたから

「…」

な、え、喜楽が迷惑かけて…

「いやいやいやいやいや、

対して凄いことにしてねえぜ？

警察みてえな奴から腕引いて暴れまくつただけだから。

人識君と園識君も居たぜ。」

「うう、いえ！！何かお礼をしないと……」

「あー……じゃあひとつ頼んでいいか？」

「はい、僕に出来ることなら何でもいい。」

「なんか奴隸みてえだな。

えっとな……、来良学園つて高校に喜楽ちゃんを入学させてほしい。

できれば殺鬼君も。」

「いや、でも僕もう大学生ですし

「情報屋の折原臨也って奴にこれ渡してほしいんだ。」

・・・SDカード・

「ちなみに見るなよ？」

「見たら爆発するぜ」

「そういう系の仕組みですか・・・。」

「玖渚ちゃんなら知ってると思つぜ」

「うー、いやちゃんはあんまり僕様ちゃん好きじゃないよ

って言つてたし。」

「う・・・玖渚さんですか」

「論・・・ってか鬨織が居なくなつてから結構暇してつからなあ。

「会こここってやれよ、暇だつたら。」

「ああ・・・今はまだ一次試験くらいでじょつかね。」

「いいハンターになればいいけどよ・・・。
ま、話戻すけど、

制服は偶然偶然女子用男子用一つかあるんだ。

あと偽造学生証と偽造身分証明証。」

「ああ、何から何までありがとついざります。」

「いや、頼んだのあたしからな。」

「ていうか僕は大学生で高校生に見えないですし喜楽は中学生で高校生に見えないですよ・・・？」

「中学生は中学生でも身長が小さいですから・・・。」

「まあ大丈夫だつて。

「ちなみに池袋だから。」

「池袋・・・？京都にそんな所は」

「東京だつての」

「！？」

5章（前書き）

「あの」3人と絡みます。

「牛乳つまー」

喜楽が屋上のフェンスを越した縁に座り足を投げ出す。

要するに危ない場所に座っている。

それも牛乳とポケコン（友と諱で解りやすく改造した）を持つている為かなり危険だ。

「パーひー牛乳つまー」

殺鬼も同じ行動に出た。右手にパーひーで左手にパーひー牛乳。

「てかさあ何でパーひー牛乳？かしこつけ？」

「お前は何で牛乳なんだよ。」

「教室でもうキャラは見せたからね。子供らしい一面を見せていいかと。」

「お前にとつて苺マーガリンパンは大人らしい食べ物かよ」

「へりじこ食べ物つすよ、もひ放課後だけね。」

えへへ と笑ひ喜樂。

「で、だいぶ、情報屋さんの情報分かった?」

覗き込むと

「わつわ」といつチャットがついた。

「・・・兄よ、せりや幾らなんでもネーミングセンスなさすぎだわ。
わつわ つて言こ辛こし無理やつだよ」

「お前何こじたんだよ。」

「わざわざこいく。

「わ」は「わら」で「わ」は「努力」。

「あ」は「愛する」で「あ」はそのまま「樂」。

喜努愛樂。」

「とも殺人鬼とは思えないな・・・。」

「えへ」

「殺人鬼？」

「「？」

「？」

「どうしたの紀田君虫でも見つけたの？」

「お前これは一人に失礼だぞ。

「一人とも顔真っ青だし傷ついたんじゃねえの？」

まあそういう時の為に俺は最高の（�）

こつから は小声タイム。

「兄ちゃん、バレたよ」

「いや落ち着け。上手いこと失神させて記憶を消すんだ

「兄ちゃん器用だもんね」

「お前がさせんだよ」

「だが断る」

「無理に決まってるだろ僕にそんな事」

「じゃあそんな事思いつくな」

喜樂のくせに普通の事語いやがつて

何それ私が異常者みたいじゃんか。

殺せにしんしゃなし？」

一 セめろ、学校は荒らすな「

• • • •

……で、いう考え方なんだけどどう！？？春夏秋冬従兄妹！」

「」の意味は？

「うわあ可愛」

「こめん聞してなかた」

「日本の古都の京都から来た大和撫子日本男児に！！」

このナウなヤンケが集まる夜の街池袋を！

紹介しようじゃないか！」

「」「」「」

「何その薄い反応」

ナア！・キララ！

「だねだねわしね」れにじゅひ「うれしこ」とおなこよやばこちゅうつれしこよしざんざいがざつくまへだよとおめやだよめりめやだよ

「うん満足！」

「・・・これで満足なんだ」

「惨めだね」

後ろの黒髪の男の人が言う。

結構ひどい。

「でもいいよねそれ

「ああ、確かにその人を探すのに一度いい。」

「人探し？」

「ああ、実は私達人を探しに来たんです。」

「うわあいいねえいいねえ運命の人を探しに従兄妹一人で京都から遙々池袋まで・・・。」

「折原臨也さんって人だよ」

「・・・」

「？」

「どうかしたのか？」

「いや、その折原臨也って・・・」

「？」

「いや、まあすぐ会えるよ。

まずは平和島静雄って人に会えればいいから。うん。」

「あ、案内して・・・」

「ああああああああああああああああああああああああああああああ俺等用事あ

るんだつた！..じゃあなー！

「アッテユーー！」

「・・・」

「・・・」

なんか無理やりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687x/>

零崎殺識の人間関係

2012年1月5日20時49分発行